

# 横查情報月報



横浜市衛生研究所

# 平成 22 年 7 月号 目次

## 【トピックス】

医動物・種類同定検査まとめ(平成 22 年 4~6 月分) . . . . .	1
残留農薬検査(その 1) . . . . .	3
遺伝子組換え食品の検査 . . . . .	7
平成 21 年度 薬事検査について . . . . .	9

## 【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成 22 年 6 月 . . . . .	10
--------------------------------------	----

## 【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報(平成 22 年 6 月分) . . . . .	14
---	----

# 医動物・種類同定検査のまとめ

## —平成 22 年 4～6 月分—

医動物担当では、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者などの依頼を受け、昆虫類を中心とした種類同定検査を行っています。昆虫類の種類を同定することによって、発生源、発生時期、人に対する害などが分かるため、効果的な対策を立てることにつながります。平成 22 年 4 月から 6 月の種類同定検査件数は、5 件 7 検体でした。依頼された 7 検体の内訳は昆虫類 3 検体、ダニ類 1 検体、その他 3 検体でした。今回は、同定結果の詳細を報告します。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
1 階屋根裏で土のようなものを発見した。	 茶褐色、約 30×40mm   蛹殻、乳白色、約 7mm	①イエシロアリ (シロアリ目)の 蟻道  ②ハチ目の <sup>さなぎがら</sup> 蛹殻 (マユ)	①土の中に、木材成分とイエシロアリ職蟻 <sup>たいさい</sup> の大腮(上顎)と兵蟻の大腮が認められた。  職蟻の大腮(上顎)  兵蟻の大腮(上顎)  イエシロアリの虫体はみられなかった。イエシロアリは、特別に加工した大きな巣を建築物内、あるいは地下に造り、蟻道を通じて加害場所に連絡する。  ②ハチ目は完全変態で、卵→幼虫→蛹→成虫と変態する。蛹化時にマユを作り、成虫となる際マユを破って、出てくる。
保育園の園庭に一晚でアリの巣口周囲に盛土があるものが多数できた。	 働き蟻、黒色、約 6mm	クロヤマアリの働きアリ (ハチ目ヤマアリ亜科)	体長約 4.5～6mm。体は黒褐色。低地や山地の明るい場所に普通にみられる。地中に営巣し、地上に直接巣口を開ける。日本に広く分布する。
→前日の降雨によって巣内に流れこんだ土砂を一晚で排出したものと推測された。	 働き蟻、黒褐色、約 3.5mm	トビイロケアリの働きアリ (ハチ目ヤマアリ亜科)	体長約 2.3～3.5mm。体は黒褐色。平野部の草地から林内に最も普通に見られる。土中、朽木の中に営巣する。日本に広く分布する。
天井の隙間から虫がでてくる。	 有翅虫、黒褐色、約 4mm	ヤマトシロアリの有翅虫 (シロアリ目)	有翅虫の体長は約 4.5～7mm。特別、塊状の巣は作らず、食害箇所が巣となる。乾燥に弱く、常に湿った木材など多湿な場所を好む。有翅虫の群飛は、4 月～5 月頃にみられる。日本に広く分布する。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
竹とりに行った後、虫体が体に付着していたことに気がついた。		タカサゴキ拉拉マダニ (クモ綱ダニ目)	大型種。成虫は大・中型哺乳類に寄生する。ヒトの寄生例はかなり多く、寄生部位は特に下半身に多い。関東の温暖地から西南日本に多く分布する。
成体、灰褐色、約 6.5mm (飽血)			
玄関と家の中で、粉状のつぶつぶを発見した。		アメリカカンザイシロアリ (シロアリ目) の糞	本種は巣や蟻道は作らず、木材に孔道をあけて生息していて、コロニーは小さい。乾燥に強く、乾いた砂粒状の糞を出す。有翅虫の群飛は、7~9月頃にみられる。
砂粒状、褐色、約 0.8mm			
虫が夜間明かりに集まり、翌朝大量の死がい床におちている。		ユスリカ亜科の一種 (ハエ目)	幼虫は側溝や泥のたまった水溜り、河川、湖沼などから発生する。成虫は、日没時に群飛して、灯りのある方向に向かって、多数飛来することがある。
成虫、茶褐色、約 1~1.5mm			

## この羽アリは アリ? シロアリ? 違いアリ?

### Point 1

#### 体のくびれ

- アリ類は、胸部と腹部の間がくびれ、突起(腹柄節)がある。
- シロアリ目はくびれがない。

### Point 2

#### 翅の形態

- アリ類の翅は膜状で、前翅に比べ後翅は明らかに小さい。
- シロアリ目は大きさがほぼ同じ。

### Point 3

#### 触角の形態

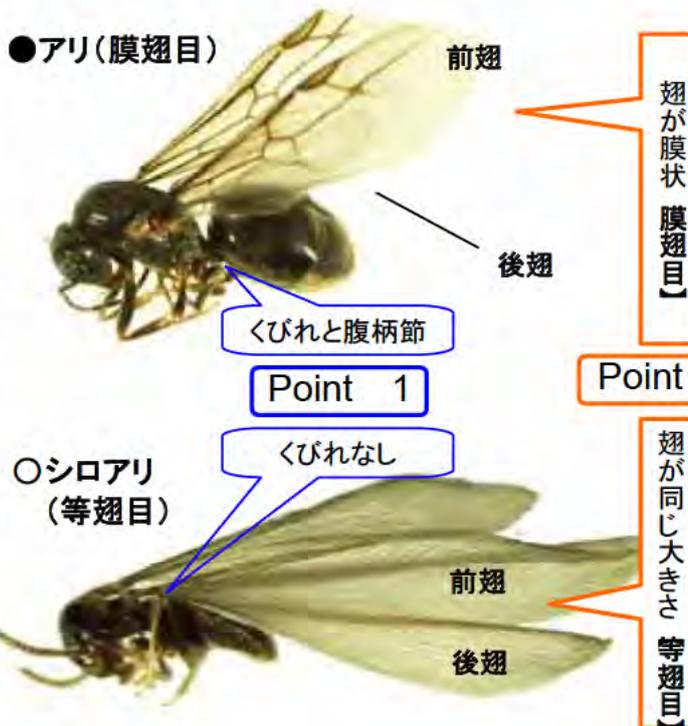
- アリ類の触角はこん棒状。
- シロアリ目はじゅず状。



●こん棒状



○じゅず状



ところで羽アリって何? アリの羽アリはアリのメスとオスです。羽アリの出現する時期は種類によって一定しており、4月頃から10月頃まで続きます。また、種類によって飛び立つ時期も様々です。おびただしい数の羽アリが結婚飛行のため巣を飛び出し、空中で交尾します。オスはすぐに死んでしまいますが、メスは翅を落とし、土の中などで女王アリとして数年間卵を産み続けます。

【検査研究課 医動物担当】

# 残留農薬検査(その1)

平成18年5月に施行されたポジティブリスト制度※に基づき、当所では一斉分析法を用いて、横浜市内に流通する農作物等の食品に残留する農薬の検査を行っています。平成22年度より一農作物当たりの検査項目数を19項目追加して113項目とし、検査体制を一層強化しております。

今回は、平成22年4月から5月末の期間に食品専門監視班により搬入された農作物等の検査結果を報告します。

## 1 市内産農作物

平成21年度に引き続き、横浜市内で生産されている農作物について残留農薬検査を行いました。4月に搬入されたキャベツ及びトマト(各3検体)の計6検体についてそれぞれ検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、キャベツ1検体からアセタミプリド及びクロルフェナピルが検出されました。また、トマト1検体からアセタミプリド及びフルジオキサニルが検出され、別の1検体からボスカリドが検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものではありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

## 2 国内産農作物

5月に搬入されたチンゲンサイ、レタス(各3検体)、トマト(2検体)及び白菜(1検体)の計9検体について残留農薬検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、チンゲンサイ1検体からアセタミプリドが検出されました。また、トマト1検体からジコホールが検出され、別の1検体からボスカリドが検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものではありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

## 3 輸入農作物(冷凍食品を含む)

5月に搬入されたカリフラワー、たまねぎ、チンゲンサイ、ブロッコリー、ほうれんそう及び未成熟いんげん(各1検体)の計6検体について残留農薬検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、ほうれんそう1検体からイミダクロプリドが検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものではありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

今回の検査で検出された農薬の概要については、5ページからの【農薬解説】を参考にしてください。

### ポジティブリスト制度※

農薬等が一定量以上残留する食品の販売等を禁止する制度のことです。

残留基準値が設定されている農薬については、その基準以内での食品への残留は認めていますが、それ以外の残留基準値の設定されていない農薬等の残留は原則として禁止されます。ただし、隣接する畑等からの農薬の飛散や、新規の農薬等の残留が考えられるため、残留基準値が設定されていない農薬等については「人の健康を損なうおそれのない量」(一律基準値0.01ppm)を設定し、それを越えた残留のある食品の販売等を全面的に禁止するという対応をとっています。

表1 残留農薬検査結果

(H22年4月～H22年5月末)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
<b>市内産農作物</b>						
キャベツ	横浜市	3	1	アセタミプリド クロルフェナピル	0.02	5 0.7
トマト	横浜市	3	1		アセタミプリド フルジオキサニル	0.02 0.12
			1	ボスカリド	0.07	5
<b>国内産農作物</b>						
チンゲンサイ	国産	3	1	アセタミプリド	0.03	5
レタス	国産	3	0			
トマト	国産	2	1	ジコホール	0.08	1
			1	ボスカリド	0.04	5
白菜	国産	1	0			
<b>輸入農作物</b>						
カリフラワー	中国	1	0			
たまねぎ	中国	1	0			
チンゲンサイ	中国	1	0			
ブロッコリー	中国	1	0			
ほうれんそう	中国	1	1	イミダクロプリド	0.02	5
未成熟いんげん	中国	1	0			

表2 農薬の検査項目及び検出限界(113項目)

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
BHC ( $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 及び $\delta$ の和)	0.005	カズサホス	0.01	シハロトリン	0.01
DDT (DDE、DDD及びDDTの和*)	0.005	カフェンストロール	0.01	シフルトリン	0.01
EPN	0.01	カルバリル	0.01	シペルメトリン	0.01
アクリナトリン	0.01	クレソキシムメチル	0.01	ジメチルビンホス	0.01
アセタミプリド	0.01	クロチアニジン	0.01	ジメトエート	0.01
アゾキシストロピン	0.01	クロマフェノジド	0.01	シメトリン	0.01
アルドリノ及びディルドリン	0.005	クロルピリホス	0.01	スルプロホス	0.01
イソフェンホス	0.01	クロルピリホスメチル	0.01	ダイアジノン	0.01
イソプロカルブ	0.01	クロルフェナピル	0.01	チアクロプリド	0.01
イプロベンホス	0.01	クロルフェンゾン	0.01	チアメキサム	0.01
イミダクロプリド	0.01	クロルフェンビンホス	0.01	チオベンカルブ	0.01
インドキサカルブ	0.01	クロルプロファミ	0.01	チフルザミド	0.01
エスプロカルブ	0.01	クロロクスロン	0.01	テトラクロルビンホス	0.01
エチオン	0.01	シアノフェンホス	0.01	テトラコナゾール	0.01
エトプロホス	0.005	シアノホス	0.01	テトラジホン	0.01
エトリムホス	0.01	ジオキサベンゾホス	0.01	テブコナゾール	0.01
エンドスルフアン ( $\alpha$ 及び $\beta$ の和)	0.005	ジクロフェンチオン	0.01	テブフェノジド	0.01
エンドリン	0.005	ジクロラン	0.01	テブフェンピラド	0.01
オキサミル	0.01	ジコホール	0.01	テフルトリン	0.01

表2 の続き

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
テフルベンズロン	0.01	フェンクロルホス	0.01	ブロモプロピレート	0.01
デルタメトリン及びトラロメトリン	0.01	フェンスルホチオン	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
テルブホス	0.005	フェンチオン	0.01	ヘキサフルムロン	0.01
トリアジメノール	0.01	フェントエート	0.01	ヘプタクロル (エポキシドを含む)	0.005
トリアジメホン	0.01	フェンバレレート	0.01	ペルメトリン	0.01
トルクロホスメチル	0.01	フェンピロキシメート	0.01	ペンコナゾール	0.01
パラチオン	0.01	フェンプロパトリン	0.01	ホサロン	0.01
パラチオンメチル	0.01	ブタクロール	0.01	ボスカリド	0.01
ハルフェンプロックス	0.01	ブタミホス	0.01	マラチオン	0.01
ビフェントリン	0.01	ブプロフェジン	0.01	マイクロブタニル	0.01
ピペロホス	0.01	フルジオキソニル	0.01	メチダチオン	0.01
ピラクロストロビン	0.01	フルシトリネート	0.01	メキシフェノジド	0.01
ピリダフェンチオン	0.01	フルトラニル	0.01	メラクロール	0.01
ピリブチカルブ	0.01	フルバリネート	0.01	メトリブジン	0.01
ピリプロキシフェン	0.01	プロシミドン	0.01	メビンホス	0.01
ピリミノバックメチル	0.01	プロチオホス	0.01	リニューロン	0.01
ピリミホスメチル	0.01	プロパホス	0.01	リンデン( $\gamma$ -BHC)	0.002
フェナリモル	0.01	プロピザミド	0.01	ルフェヌロン	0.01
フェントロチオン	0.01	プロメカルブ	0.01		

※ DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

## 【農薬解説】

### アセタミプリド

『モスピラン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。広く使用されている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。

平成21年度に実施した検査では、いちご、チンゲンサイ、ぶどう、ブロッコリー及びももから検出された農薬です。

### イミダクロプリド

『アドマイヤー』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤で、即効的な殺虫効果があります。平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

### クロルフェナピル

『コテツ』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。多くの野菜に適用があり、従来の殺虫剤に耐性がある害虫に対しても効果があります。

平成21年度に実施した検査では、トマト、なし、ピーマン、ぶどう及びみずなから検出された農薬です。

### ジコホール

『ケルセン』などの商品名で殺虫剤として一般的に販売されていましたが、平成16年に農薬の登録が失効されました。

#### フルジオキシニル

『セイビアー』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤です。各作物の灰色かび病菌に対して極めて高い効果があります。

平成21年度に実施した検査では、ブルーベリーから検出された農薬です。

#### ボスカリド

『カンタス』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤です。各作物の灰色かび病や菌核病に対して高い効果があり、残効性や耐雨性にも優れています。平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

#### ※参考文献

- ・社団法人日本植物防疫協会，農薬ハンドブック2001年版
- ・農薬残留分析法研究班，最新農薬の残留分析法(改訂版)

【 微量汚染物担当 】

# 遺伝子組換え食品の検査

平成22年4月に、各区福祉保健センターが収去した計60検体について、遺伝子組換え食品の検査を実施しました。

遺伝子組換え食品は、内閣府にある食品安全委員会で安全性に問題ないと判断され、承認されたものが国内で流通可能になります。検査は、承認済みのものについては定量検査(食品中に遺伝子組換え品種がどのくらい含まれているかを調べる検査)を行います。一方、未承認のものについては定性検査(食品中に遺伝子組換え品種が含まれているかを調べる検査)を行います。今回、承認済みについてはラウンドアップ・レディー・大豆とEvent176、Bt11、T25、Mon810、GA21トウモロコシの定量検査を、未承認についてはBtコメとBt10トウモロコシの定性検査を実施しました。

## 1 定量検査

豆腐13検体及び大豆穀粒2検体についてラウンドアップ・レディー・大豆の定量検査を、また、トウモロコシ粉砕品3検体についてEvent176、Bt11、T25、Mon810及びGA21トウモロコシの定量検査を行いました。その結果、いずれも混入率は5%以下<sup>\*1</sup>であり、違反検体はありませんでした(表1、2)。

表1 ラウンドアップ・レディー・大豆の検査結果

品名	原産国	検体数	混入率5%を超える検体数
豆腐	日本	13	0
大豆穀粒	アメリカ	2	0

表2 Event176、Bt11、T25、Mon810及びGA21トウモロコシの検査結果

品名	原産国	検体数	混入率5%を超える検体数
コーングリッツ	日本	2	0
コーンフラワー	日本	1	0

<sup>\*1</sup> 安全性審査を経た遺伝子組換え食品は、混入率が5%を超えると表示義務が生じ、「遺伝子組換え」である旨の表示をしなければなりません。一方、5%以下なら表示義務はなく、「遺伝子組換えではない」等の表示をすることもできます(ただし、書類等で確認ができること、かつ、意図的に遺伝子組換え食品を混入していないことが前提になります)。そのため、安全性審査を経た遺伝子組換え食品の検査では、混入率が5%を超えているかどうかを調べることになります。

## 2 定性検査

コメ加工品30検体(せんべい、ビーフンなど)についてBtコメの定性検査を、また、トウモロコシ加工品15検体(菓子類など)についてBt10トウモロコシの定性検査を行いました。その結果、いずれも不検出であり、違反検体はありませんでした(表3、4)。

表3 Btコメの検査結果

品名	原産国	検体数	検出数
せんべい	日本	16	0
	台湾	1	0
	タイ	1	0
ビーフン	台湾	3	0
	タイ	2	0
米粉	日本	4	0
ライスペーパー	ベトナム	2	0
ライスヌードル	タイ	1	0
計		30	0

表4 Bt10トウモロコシの検査結果

品名	原産国	検体数	検出数
菓子類	日本	10	0
タコシエル	アメリカ	1	0
	オーストラリア	1	0
コーングリッツ*	日本	2	0
コーンフラワー*	日本	1	0
計		15	0

\* コーングリッツ2検体とコーンフラワー1検体は、定量検査と同一検体

【検査研究課 食品添加物担当】

# 平成21年度 薬事検査について

平成21年度は健康福祉局医療安全課の依頼により、医薬品、いわゆる健康食品及び化粧品の試買検査を実施しました。

## 1 医薬品検査

横浜市内の薬局で製造販売されている薬局製剤「感冒剤13号A」4検体について、重量偏差試験並びにアセトアミノフェン、エテンザミド、マレイン酸クロルフェニラミン、*dl*-塩酸メチルエフェドリン、カフェイン、リン酸ジヒドロコデインの確認試験及び規格試験を行いました。その結果、1検体がマレイン酸クロルフェニラミンの規格試験に適合しませんでした。

## 2 いわゆる健康食品等の検査

「ダイエット」、「痩身」等を標榜し、肝機能障害等が問題となる「いわゆる健康食品」17検体について、セナ、フェンフルラミン、*N*-ニトロソフェンフルラミン、エフェドリン類及び甲状腺ホルモンの検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

強壮効果を標榜する「いわゆる健康食品」6検体について、シルデナフィル、タダラフィル、バルデナフィル、ホンデナフィル、キサントアントラフィル、チオキナピペリフィル、メチルテストステロン及びヨヒンビンの検査を行いました。その結果、1検体からタダラフィルと「専ら医薬品として使用される成分本質」に該当する新規医薬品ヒドロキシチオホモシルデナフィルが検出されました。さらに、プソイドバルデナフィル、バルデナフィルが1検体から検出されました。また、薬事法違反の疑われる1検体について、ホンデナフィル及びチオアイルデナフィルの検査を行った結果、チオアイルデナフィルが検出されました。

## 3 化粧品検査

育毛、養毛を標榜する製品2検体について、ミノキシジル、エストラジオール安息香酸エステルを検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

### 薬局製剤 とは

薬事法第22条薬局における製造販売の特例において、薬局開設者が当該薬局における設備及び器具を持って製造することができる医薬品のことで、現在は約400品目あります。

【検査研究課 薬事担当】

# 感染症発生動向調査委員会報告 6月

## 今月のトピックス

- A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が高めです。
- 水痘と流行性耳下腺炎は、過去5年間に比べて高めに推移しています。
- 伝染性紅斑が高めです。
- ヘルパンギーナが高めです。

平成22年5月24日から6月20日まで(平成22年第21週から第24週まで。ただし、性感染症については平成22年5月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

### 平成22年 週 - 月日対照表

第21週	5月24～30日
第22週	5月31日～6月6日
第23週	6月7～13日
第24週	6月14～20日

### 全数把握疾患

#### < 腸管出血性大腸菌感染症 >

O26の2例の報告がありました。家族内事例で、自宅での肉の加熱不十分が疑われます。肉類は十分な加熱を心がけましょう。発生時の対応につきましてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所HP [http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/inf\\_c\\_o157\\_guide.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/inf_c_o157_guide.html)

#### < デング熱 >

インドネシアからの帰国者に1例見られました。同行者の感染は認められていません。

#### < 麻疹 >

2010年6月は3例の報告がありました。ワクチン接種歴があったのは1例だけでした。すべて孤発例であり、周囲への感染は認められていません。

(日本は、2008年～2012年の5年間で、麻疹排除を目指します)

風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握  
1歳および就学前1年間の、麻疹風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底  
5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

国立感染症研究所 HP <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html> より

#### < 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 >

2例の報告がありました。A群とG群でした。今年に入って5例目の報告です。昨年の報告は1例のみでした。当疾患は、約30%が死亡している極めて致死性の高い疾患です。詳しくはこちらを御覧ください。

国立感染症研究所HP [http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02\\_g2/k02\\_46/k02\\_46.html](http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_46/k02_46.html)

#### < 破傷風 >

1例の報告が見られました。66歳の方です。転倒による外傷が原因と見られています。全国では年間100人程度報告され、5月から10月といった野外活動が多くなる時期に増加しています。全国で2008年に行われた破傷風毒素抗体の保有状況では、60歳代以上では保有率11%と極めて低く、5年後の次の調査結果が待たれる状況です。

臨床症状や所見から破傷風と診断した場合は7日以内の届出が必要です。破傷風につきましては、こちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所 HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/tetanus1.html>

国立感染症研究所 HP <http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/349/tpc349-j.html>

## 定点把握疾患

### 1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:91か所、内科定点:59か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計197か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計150定点から報告されます。

#### <A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

第24週は定点あたり2.94でした。この時期では2008年について高く報告されています。

行政区別では、瀬谷区が16.00、港北区が9.13、都筑区7.00と高めです。全国では1.75、神奈川県域(横浜、川崎、相模原を除く。以下県域)1.69、川崎市2.67、東京都1.85です。

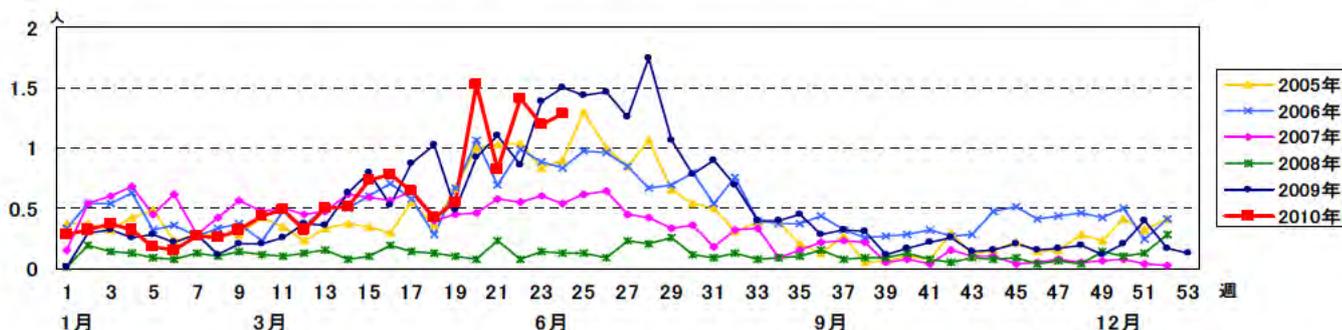
#### <水痘>

第24週は定点あたり2.26です。行政区別では、瀬谷区が7.00、緑区が5.80と高めです。

全国では2.21、県域2.46、川崎市1.64、東京都1.86です。

#### <伝染性紅斑>

第24週は定点あたり1.29です。過去5年間の中でも高めで推移しています。行政区別では、瀬谷区が7.33、泉区6.00、南区2.80、戸塚区2.50と高めです。全国では0.64、県域2.18、川崎市0.36、東京都0.61です。



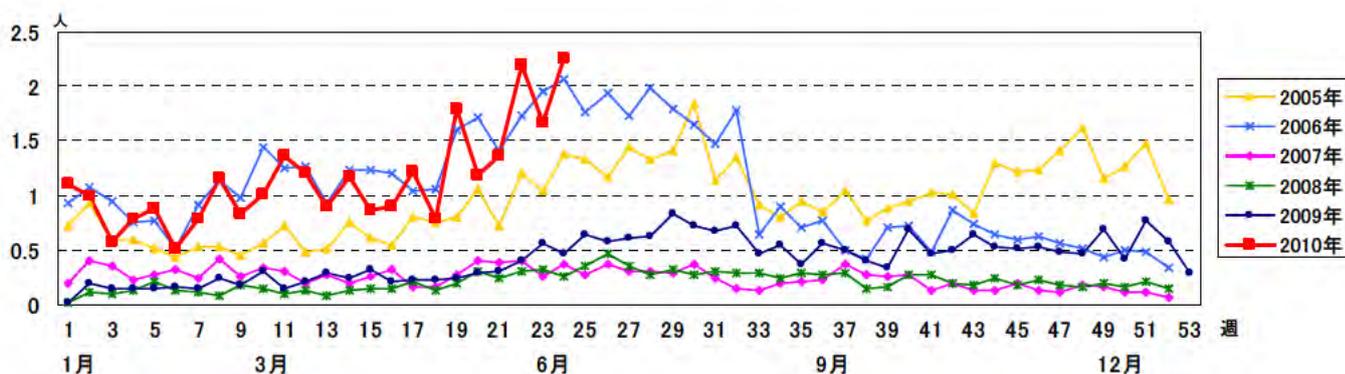
#### <ヘルパンギーナ>

第24週は定点あたり2.60です。行政区別では磯子区8.25が高めです。

全国では1.56、県域2.31、川崎市2.64、東京都1.90です。

#### <流行性耳下腺炎>

第24週は定点あたり2.25です。行政区別では、神奈川区6.00、泉区5.00、緑区4.60、旭区3.80、瀬谷区3.00が高めです。全国では1.51、県域2.01、川崎市0.82、東京都1.18です。過去5年でも高めに推移しています。



### < 性感染症 >

性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

5月は、4月に比べて全体としては横ばいです。性器クラミジアは男性12例、女性13例の報告がありました。性器ヘルペス感染症は、男性4例、女性17例です。尖圭コンジローマが男性9例、女性1例です。淋菌感染症は男性12例、女性2例です。

【 感染症・疫学情報課 】

### 2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

### < ウイルス検査 >

2010年6月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点48件(鼻咽頭ぬぐい液45件、ふん便3件)、眼科定点4件(結膜ぬぐい液)、基幹定点3件(咽頭ぬぐい液2件、髄液1件)でした。

患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は上気道炎19人、下気道炎12人、ヘルパンギーナ5人、胃腸炎、手足口病、発疹症、伝染性紅斑各3人、眼科定点は流行性角結膜炎3人、急性出血性結膜炎1人、基幹定点は急性小脳失調症1人、麻疹1人、伝染性紅斑1人でした。

7月9日現在、小児科定点の上気道炎患者1人からヘルペスウイルス1型、1人からアデノウイルス(型未同定)、手足口病患者1人からコクサッキーウイルスA6型、眼科定点の急性出血性結膜炎患者からアデノウイルス37型が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の上下気道炎患者6人からコクサッキーウイルスA(4型5人、型未同定1人)、2人からヒューマンメタニューモウイルス、ヘルパンギーナの患者5人からコクサッキーウイルスA(4型4人、6型1人)、手足口病患者1人からコクサッキーウイルスA6型、伝染性紅斑患者2人からヒトパルボウイルスB19型、基幹定点の伝染性紅斑患者1人からヒトパルボウイルスB19型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【検査研究課 ウイルス担当】

### < 細菌検査 >

6月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点からの糞便が2件で起因菌は検出されませんでした(表)。基幹定点からは菌株受付が6件、定点以外の医療機関からは菌株が4件でした。そのうち、基幹定点から、腸管毒素原性大腸菌が2件(O6:H16、LT & ST産生およびO6:H-、LT & ST産生)、腸管病原性大腸菌O111:H12が1件、定点以外の医療機関からは腸管出血性大腸菌O26、VT1およびO157、VT1 & 2が各1件、赤痢菌(*S.flexneri*)とパラチフスA菌が各1件 検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点からの21件で、A群溶血性レンサ球菌が17件から検出されました。その血清型はT1が5件、T4が1件、T6が1件、T12が1件、T25が1件、T28が5件、型別不能が3件でした。

百日咳疑いの検体受付が1件ありましたが百日咳菌は検出されませんでした。

基幹定点からリンパ節より分離された検体受付は1件で*Corynebacterium ulcerans*でした。

定点以外の医療機関から劇症型溶血性レンサ球菌感染症から分離された検体が1件あり、A群溶血性レンサ球菌で、その血清型はT13でした。

バンコマイシン耐性腸球菌感染症から分離された検体の受付が1件ありバンコマイシン耐性腸球菌 (*Enterococcus faecium*) vanA遺伝子保有株でした。

また、細菌性髄膜炎より分離された検体受付は1件あり *Streptococcus suis* と確認されました。

表 感染症発生動向調査による病原体検査(6月) 細菌検査  
感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	6月			2010年1~6月		
	小児科	基幹	その他**	小児科	基幹	その他**
菌種名						
赤痢菌			1		2	2
腸管病原性大腸菌		1			5	
腸管出血性大腸菌			2		2	14
腸管毒素原性大腸菌		2			2	
パラチフスA菌			1			1
サルモネラ				1		
不検出	2	3		9	42	

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	6月			2010年1~6月		
	小児科	基幹	その他**	小児科	基幹	その他**
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌						
T1	5			19		1
T4	1			2		
T6	1			1		
T12	1			4		
T13			1			1
T25	1			1		
T28	5			7		
T B3264				1		
型別不能	3			3		
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌					2	
バンコマイシン耐性腸球菌			1			3
髄膜炎菌						1
<i>Streptococcus suis</i>			1			1
<i>Corynebacterium ulcerans</i>		1			1	
不検出	5			14		4

\*\* 定点以外医療機関(届出疾病の検査依頼)

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

[検査研究課 細菌担当]

# 衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成22年5月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成22年6月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

平成20年4月、市民にわかりやすくかつ迅速な情報提供を目指して、リニューアルを行いました。

今回は、平成22年5月のアクセス件数、アクセス順位及び平成22年6月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

## 1 利用状況

### (1) アクセス件数 (平成22年5月)

平成22年5月の総アクセス数は、229,214件でした。主な内訳は、感染症68.3%、食品衛生11.8%、保健情報8.5%、検査情報月報3.1%、生活環境衛生1.6%、薬事1.2%でした。

### (2) アクセス順位 (平成22年5月)

5月のアクセス順位(表1)は、第1位が「口てい疫(口蹄疫)について」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「ロタウイルスによる感染性胃腸炎について」でした。

第1位に「口てい疫(口蹄疫)について」が入りました。これは、4月に入ってから、宮崎県で口蹄疫の感染が確認された事による影響と思われる。

第2位に「マイコプラズマ肺炎について」が入りました。

国立感染症情報センターの報告によりますと、マイコプラズマ肺炎の定点あたり報告数は、第18～22週(5/3～6/6)で増加しており、過去5年間の同時期と比較してやや多い状況です。

第3位に「ロタウイルスによる感染性胃腸炎について」が入りました。

感染性胃腸炎は主に冬季(11～4月)に流行する感染症です。全国の地方衛生研究所のウイルス検出状況を見ると、冬季の前半はノロウイルスによる感染性胃腸炎が多く、後半はロタウイルスによる感染性胃腸炎が多いです。

また、5月にアメリカ合衆国で、ロタウイルスワクチン中に豚サーコウイルス1型(porcine circovirus type 1: PCV1)豚サーコウイルス2型(porcine circovirus type 2: PCV2)のDNAが検出されました。しかし、豚サーコウイルス1型・2型の人間に対する病原性は知られておらず、米国FDAが接種再開・接種継続の勧告を出しました。この影響もあり、アクセス件数が増加したものと考えられます。

第4位に「百日咳について」が入りました。成人での感染が増加しており、成人の占める割合が、過去10年間で最高となっています。

「ぎょう虫(蟯虫)症について」が、初めて10位以内に入りました。

表1 平成22年5月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	口てい疫(口蹄疫)について	41,782
2	マイコプラズマ肺炎について	10,560
3	ロタウイルスによる感染性胃腸炎について	6,164
4	百日咳について	4,801
5	大麻(マリファナ)について	4,628
6	衛生研究所トップページ	3,945
7	アデノウイルス感染症について	3,414
8	感染症トップページ	2,835
9	性器ヘルペス感染症について	2,543
10	ぎょう虫(蟯虫)症について	2,521

データ提供: 総務局IT活用推進課

(3) 電子メールによる問い合わせ（平成22年6月）

平成22年6月にホームページのお問合わせフォームを通していただいた電子メールによる問い合わせの合計は、3件でした(表2)。

表2 平成22年6月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
横浜市衛生研究所年報について	1	検査研究課 水質担当
インフルエンザに関する報道記事について	1	検査研究課 ウイルス担当
Hibについて	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事（平成22年6月）

平成22年6月に追加・更新した主な記事は、9件でした(表3)。

表3 平成22年6月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
6月2日	ヒト・パピローマウイルスと子宮頸癌について	更新
6月7日	大麻(マリファナ)について	更新
6月10日	感染症に気をつけよう(6月号)	追加
6月14日	健康危機管理情報	更新
6月14日	新型インフルエンザ(AH1pdm)について	追加
6月18日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新
6月30日	犬による咬傷(こうしょう、かみきず:bite)について	更新
6月30日	カプノサイトファーガ-カニモルサス感染症について	更新
6月30日	パストツレラ症について	更新

【 感染症・疫学情報課 】